



静脩

2010年6月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 47. No. 1

静脩企画 利用者座談会

「こうあってほしい！京大の図書館・室」

日時：2010年5月20日(木) 14:30-16:30
 場所：附属図書館4階小会議室1

図書館（以下、図と記す）：静脩にとってはじめてのこころみとして「利用者座談会」を企画しました。

本日はみなさまがたからどのようなお話を伺えるのか、大変楽しみにしています。

【参加者のプロフィール】

図：ご所属と、普段どのように図書館・室を使っているかをご紹介します。

A：文学部の4回生で、普段は専門資料の閲覧に、所属部局の図書館を利用しています。あと附属図書館にしかない雑誌や、人環にしかない図書を利用することもあります。

B：教育学部の4回生で、附属図書館3Fの情報端末エリアをよく利用しています。大学に来る日は必ず利用するので週に3～4回は利用しています。

C：農学研究科の修士2回生で、1か月に3回ぐらい附属図書館を利用します。

D：教育学研究科の博士課程です。院生は研究室があるので、場所を利用するというよりも資

料の取り寄せで図書館を利用しています。

E：工学部の4回生で、附属図書館や所属学科の図書室を利用しています。

F：経済学研究科の修士1回生です。院生になってからは普段は研究室で勉強をしています。土日は附属図書館で勉強、平日は所属部局の図書室に行きます。附属図書館は土日開いていますが、所属部局の図書室は開いてないので。

G：法学部の3回生です。サークルの勉強会で模擬裁判をするときに外国の文献を利用したり、



民法のゼミで教材や論文を利用したり、所属部局の図書室をよく利用しています。

H：経済学部で4年生で、普段は所属部局の図書室を利用しています。附属や人環の図書館も利用します。人環の図書館では勉強というよりも趣味の本を見たり、くつろぎのスペースとして利用しています。

「こうあってほしい！わたしたちの図書館・室」

図：今年度の静脩は「利用者サービス」がテーマです。学生さん・院生さんの望む図書館になるためにはどうしたらよいか、みなさんがこうあってほしいと思う図書館のイメージを語っていただければと思います。

【KULINE（蔵書検索）をもっと便利に】

E：図書の電子化は進んでいますか？

図：現在、図書がどこにあるかを探すためのデータ化をしている段階です。カードでしか検索できない資料もまだまだたくさんあります。

A：将来的にはすべてKULINEでひけるようになるのですか？

図：計画的に進めています。

A：いまだどれくらいの図書がKULINEで検索可能ですか？

図：637万冊中480万冊くらいです。ところで、みなさんはKULINEや図書館機構のサイトは使っていますか？

A：KULINEは使いますが、図書館機構のサイトはほとんど見ないです。

図：MyKULINE（p.15参照）は使っていますか？

A：使ったことはありますが、あまり使ってはいません。

C：貸出更新とかで利用します。使い方も図書館の人に聞いて教えてもらいました。

B：KULINEにあれば便利な機能として、自分が見たい文献をチェックしておいて、いざ探しに行くときに、公共図書館のようにレシートが出るとよいと思います。

G：タイトルを憶えているだけでは書庫に行っても目的の雑誌を見つけれない時があります。請求記号をメモっておけばよいのですがよく迷います。

図：KULINEの検索画面にQRコードがあって携帯をかざすと請求記号が出るようなものがあれば使いますか？

H：使いません。

B：紙の方が便利です。



F：アマゾンのようにこの本を検索した人はこういう本を見ています、のようなレコメンド機能があるとおもしろいと思います。

A：キーワードを何個か入れると関連ワードを提示してくれるサイトがありますが、そのような機能があればよいと思います。

D：自分の専門が狭いので他人に自分の研究がわかるのは嫌かもしれません。

【電子ジャーナル・データベースの利用は】

図：電子ジャーナルや日本語のデータベースは利用しますか？

A：あまり利用しません。

G：GeNii、CiNiiや、LexisNexisなど英語のものを使います。

D：Magazine Plusを使います。

C：難しくて使えなさそうというイメージがあります。先生方もそんなに使いこなしているようには見えません。

G : KULINE から行けるとよいと思います。有用なのに知らないものがたくさんあります。CiNii も KULINE も時間帯に関係なくいつも遅いです。

図 : 図書や雑誌のタイトルだけでなく、論文なども検索できる統合サービスが導入されたら使いますか？

A : 使います！(全員同感)

図 : KULINE の左に電子ブックや電子ジャーナルのリンクがありますが。

G : 横に出てきますが目立ちません。

E : 検索が0件のときに他の検索サービスに案内してくれる機能があったらよいと思います。

【機関リポジトリ KURENAI】

図 : 機関リポジトリをご存知ですか？

H・D : 使ったことはありませんが、名前は聞いたことがあります。

A・G・F : 知りません。

図 : 京都大学学術情報リポジトリ KURENAI は、学術雑誌掲載論文、学位論文、紀要論文などの京都大学の研究成果を Web 上で公開するサービスです。各研究科や研究室で発行する紀要が約 90 誌登録されていて、KURENAI で論文の本文を読むことができます。(KURENAI 関連記事を pp.12-13 に掲載)

G : それは是非 KULINE と統合したほうがよいですね。

E : KULINE が一番認知度が高いのでそれと一緒にうまく使えるとよいと思います。

F : 一つの DB で単語を検索すればなんでも OK みたいなサービスがほしいです。

【資料を再配置してほしい】

A : 所属部局の図書館で途中の号が欠けている雑誌を附属図書館が持っているなど、所蔵が分散しています。

G : 所属部局の図書室で借りたい本がなかったので、他学部の図書室に行ったことがあります。

そこではほとんど利用されていないようでしたので、そういった図書をできれば使うところに統合してほしいです。

E : 利用統計を取って再配置すればよいと思います。

図 : 図書は部局ごとに購入・管理していますので、ある部局で購入した図書を別の部局や別の場所に動かしたり集めたりするのは不可能ではありませんが難しいのが実情です。

【講習会をもっと活用してもらうには？】

H : ゼミで、検索方法の講習会を附属で受けたことがあります。もっとみんな受けたらよいと思います。図書館で広報をしているとは思いますが、知らない学生も多いです。



講習会の様子(附属図書館3階講習会室2010年6月)

図 : 昨年度のアンケート結果を見ると、講習会は認知度が低いものの、受講した人は大変満足しているようです。図書館では講習会をもっと増やしていこうと考えているのですが、どんな場所で広報すればよいですか？

H : 学食がよいと思います。

G : 生協の三角柱とか階段のドアのところ、エレベーターの中に貼っておくとよいと思います。

B : 教育学部はメールが発達していますが、図書館でもメールマガジンを作ればよいのではないですか？

図 : 実はもうすでにあるのです。

図：学部の掲示板など、授業があるときは絶対見るといようなものはありますか？

H：確実なものはないです。



オリエンテーションの案内
(附属図書館玄関2010年4月)

C：講習会があってもふだんは行こうとは思いません。必要と思わなければ。ゼミでレポート提出の宿題を出すときに先生に、「こういうのがあるから利用したら」と同時に紹介してもらおうと、行ってみようかということになると思います。

F：講習会のためにスタッフの時間を割いていただくのが少々無駄に感じます。講習会は映像資料などで代替することによってもっと減らせないかなと思います。

G：ガイダンスよりゼミやサークルの先輩など知人から情報を得ることが多いです。何気ないところに紙で貼っておくとよいと思います。

E：KULINEの認知度が高いのでそれをうまく利用して広報すればよいと思います。

G：入学時に利用ガイダンスを行うとよいと思います。1回生のやる気満々のときに思わず惹かれるようなチラシを工夫して魔法をかけるような感じで。全学より学部などの小規模でするのがよいと思います。

【レファレンスガイド】

F：1階に置いてあるドキュメント(レファ

レンスガイド¹⁾)がかなりまとまっているので、あれを配ればよいのではないですか？

図：学部の図書館・室に置けばよいですか？

F：積んでおいても誰も見ないです。

図：どう広報したらよいと思われますか？

A：映像とか。

F：映像化したものを学部図書室のホームページ上に置いてもらえばよいと思います。

図：昨年度のアンケート調査結果では、図書館サービスで一番知られていないのがレファレンスガイドでした。もっと利用してもらうにはどうすればよいと思いますか？

F：自分が必要だと思ったときに初めて使いたくなくとも思います。内容を映像化してDVDなどにしておき、貸し出せばよいと思います。DVDにされていれば1.5倍速で見ます。

G：見ないですよ。

A：いつでも見たい時に利用できるようにしておくのがよいと思います。モニターで流しておけばよいと思います。

【レポート・卒論で図書館を使うか？】

図：レポートを書くときに図書館を使いますか？

G：ふだん図書館を利用している人は行くと思いますが、図書館のことをあまり知らない人は資料を使わず引用文献もあげないで考えていることだけで発表する人もいます。

図：卒論の時は図書館を使いましたか？

F：卒論のときは相当使いました。図書館で海外から文献を取り寄せていました。

【大学間相互利用をもっと便利に】

F：相互利用の話ですが、紹介状がないと入れない大学図書館があります。京都・関西圏では京大の学生証だけで入れるようにしても

¹⁾ CiNiiなどのデータベースやKULINEなどの使い方や新聞、学位論文、判例の探した方など研究・学習に有用な情報をA4で1枚程度にまとめたもの

らいたいです。また、紹介状を出してもらうのに一日かかるというのがきびしいです。

G：相互利用の送料が高いです。往復の送料がかかるので。

【図書館の学習サポート力】

D：図書館にスペシャリストがいてくれると非常に助かります。

E：調べ方などについて図書館の人によく聞きます。そこまで自分のためにしてくれるのか、というぐらいに教えてくれます。

F：ありえないくらい能力があります。そこに人員を割いてほしい。

B：卒論演習で教育学部の先生が図書館の使い方を教えてくれました。学部や専攻、また自分でやっていることによってニーズは異なると思います。専門レベルになると講習会では不十分なので授業で必要なときに教えてもらうのがよいと思います。図書館の人に質問をしたら「ちなみに、は知っていますか」とアドバイスされたこともあります。それまでは本を借りるところ＝図書館というイメージでした。今後は、授業や学部ともしっかり連携させてやっていくとよいと思います。

D：図書館の人の異動は多いのですか？ルーティンとして短いスパンで異動するのはわかりませんが、できれば長く同じところで働く人がいるとうれしいです。

図：専門図書館員みたいな人がいればよい、ということですか？

F：そういう形がキャリアの一つとしてあってほしいです。人事制度として。

図：図書館に院生さんがTAとしていたらよいと思いますか？

E：あの人に聞けばわかるという人がいるとよいと思います。

F：院生が座っているとよいかもしれません。ゼミの教授とかにこういうのがあるという告知をしてもらうのがよいと思います。

図：教員との連携が必要ということですね。

附属図書館について

【学習室24】

C：24時間学習室ができて学生にはすごく便利になったと思いますが、一方で24時間開いていると生活リズムがくずれる人もいます。社会的には問題がないのでしょうか。

E：建築学科には製図室という1回生からでも気軽に利用できる場所がありますが、他ではそのような場所がありません。大学としてこういう施設があるべきだという考えのもと開室したのですか？

図：一昨年度、附属図書館は利用者のニーズに



学習室24

(飲食可能な「なごみ」から「自学24」を望む)

対応した全館改修を行うことになりました。そのときに、特に学生さんたちの要望に応える形で、学習室24という大学の中にこれまでになかった新しいスペースを置くことにしました。

図：学習室24で夜明かしたことはありますか？

E：2、3回はあります。でもみなさんだいたい2時頃には帰ります。

F：休日に開いていないのが残念です。

【もっと遅い時間まで利用したい】

D：図書館全体の24時間開館は無理ですか？

F：全てのスペースを自由に利用できなくてもよいので、郵便局の時間外窓口のように、12時頃までカウンターに人がいて、利用したい図書

を申請すれば出納してくれるような形で開館できないでしょうか？ 24時間図書が借りられるなら有料でもよいです。

【レファレンス担当には目印がほしい！】

E：インフォメーションも含めて受付のレイアウトがわかりにくいです。

D：質問を受け付けているところにはもっと大きなクエスチョンマークとかあるとよいと思います。

G：カウンターは人がザッと並んでいて、さすがにはじめはとっつきにくいですし、話しかけにくいです。

A：いつも忙しそうに見えるから遠慮してしまいます。

E：質問にこたえてくれる、それ専門の人かどうかわからないですし。

図：レファレンス担当というのがわかるような名札をつけたほうがよいでしょうか。

F：よいと思います。それだけでもやってほしいです。

【利用環境で気になること】

D：コピー機をB上の新聞縮刷版があるところに置いてほしいです。縮刷版は結構大きいので近くにコピー機がないと不便です。

E：地下でよく迷います。狭いので仕方ないところもありますが、サインが少ないと思います。

G：学習室24で荷物だけ置いて席取りする人が多いです。また、空調の問題かもしれませんが空気がどんよりしています。

F：友達が学習室24のトイレが夜間以外は一旦外に出ないといけないうのが嫌だといっていました。

図：夜間にご利用いただいているトイレは、昼間は入庫者と職員のみが通る場所にあるためご利用いただけません。

B：学習室24の臭いが気になります。消臭ス

プレーを使うなど、衛生面で注意していただければ助かります。3階のパソコンの部屋も是非消臭対策をしてください。今日はこれだけは言おうと思って来ました。

A：ブックポストが開館時間中に外にないので不便です。返却するためにわざわざ入館しないといけないので。

C：図書館入口の上、吹き抜けのすぐ横あたりの席で階下のバタバタ音がうるさいです。



部局図書館・室について

E：開館時間が短いです。学生は場所もないので、時間を融通してほしいです。

A：土日も開けてほしいです。

F：専門的な図書館・室こそ、長い時間あけてほしいです。できれば日曜日の3時間ぐらいは開いてほしいと思います。

F：他学部の書庫に入りたいです。ブラウジングしたいのですが書庫に入れません。別に悪さをするわけではないので入れてほしいです。

A：所属部局の図書館の雑誌書庫が違う建物に行ってしまいました。入口が3階なので、いったん3階まで上がって、雑誌を見るのにまた書庫へ下がらなくてはならず、不便です。本館の地下書庫から入れるようにできれば良かったのですが。

E：桂キャンパスの建物も設計に問題があると思います。

A：所属学部の図書館が地下にあるので寒い

す。せめて閲覧室だけでも対策してほしいです。

G：所属部局の書庫の中に椅子が少なく、いつも立ったままで読んでいます。簡単なものでよいので椅子を置いてほしいです。

D：私も、そこでは床に座って読んだ経験があります。たしかに椅子が少ないです。

E：閲覧する時に、本を置くためのスペースがあるとよいと思います。

G：よく利用する図書室の工事が続いていて、今年は所属学部の図書室の一部が使えなくなるのが本当に困ります。これだけは今日言いたいと思って来ました。

図：要望があれば直接ご所属の図書館・室に出していただければよいと思います。

G：口ではみんな言っているけど、学生の方から図書室にまとまって話をもっていくというのはなかなか難しいです。身近にいる先生に言うくらいで。

E：署名活動などして意見書を出せばよいのではないですか？

C：私の所属部局では、院会が機能しています。

F：学生の声で徐々に使いやすくなっていった図書室もあるので、他の図書室でもノウハウを聞いて同じようにできればよいと思います。

おわりに

ご参加いただきました学生・院生の方々から約2時間にわたり、忌憚のない、数多くの貴重なご意見をいただきました。紙面の都合上、一部しか掲載できませんでしたが、当日いただいたご意見はすべて各図書館・室に伝え、可能なところから今後の改善に生かしてまいります。また、今回のご意見をもとに改善できた事項については、今後の静脩の紙面で報告させていただく予定です。

図書館機構では、全学の図書館・室が、より「便利で・使いやすく・快適に」なるよう、これからも利用者サービスの改善に努めてまいります。



附属図書館 1階 Suggestion Box



図書館機構 > 図書館について >
ご意見・お問い合わせ > Suggestion Box

図書館では、利用者みなさまがたからのご意見・ご要望をお待ちしております。

図書館機構 / 附属図書館へのご意見・ご要望は「Suggestion Box」へお寄せください。

http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/liaise/index.php?form_id=8

部局図書館・室へのご意見・ご要望は、各図書館・室までお寄せください。

(図書館機構)

<一冊の本シリーズ 16>

60言語で書かれた一冊の本

石井米雄 / 千野栄一編『世界のことば・出会いの表現辞典』(三省堂、2004年)

人文科学研究所准教授 池田 巧



よく「ことばは情報伝達的手段だ」というが、出がけに近所の人と会って「お出かけですか」と声をかけられ「ええ、ちょっとそこまで」と答える。この会話はいったい何を伝達しているのだろうか。「お出かけ」なのはその様子を見ればわかる。「ちょっとそこまで」という答えにも何ら具体的な伝達情報は含まれていない。もしも「そこまでってどこまでですか?」とか「何をかうんですか?」と具体的な情報を求めようものなら、逆に警戒心が生まれかねないだろう。つまり挨拶を交わすのは情報伝達が目的なのではなく、「声をかける」という行為そのものが重要なのだ。挨拶とは、ことばを交わすことによって仲間意識を造り出し、維持していくための機能をもった言語表現なのである。それゆえどんな場面でどんなことばをかけ、そしてその表現がいったいどういう意味を持つのかを記述することは、そのことばが交わされる社会と文化を語ることにほかならない。

『世界のことば・出会いの表現辞典』(三省堂、2004年)は、世界60言語の典型的な挨拶表現を集めて対照させ、その挨拶が交わされる社会と文化の違いが一目瞭然となるように解説したユニークな辞典である。東南アジア研究の泰斗で本学名誉教授であった石井米雄先生と、スラブ諸語の専門家で言語学エッセイの名手であった千野栄一先生のお二人が編者となり、現地経験の豊富な研究者が各言語の挨拶表現について執筆している。収録する言語の配列がまたみごとで、ためしに地球儀でこれらのことばが話されている地域をたどってみるとよい。東から西へ、ことばと文字の世界一周旅行が楽しめる。最初の項目「初めて出会った時のことば」に対応するアイヌ語には「定型の言いかたはない」となっているが、そこに付された1頁半にわたる注記を読めば、挨拶が文化そのものであり、どれほど奥深いコミュニケーションの産物であるかがわかるだろう。「電話をかけるときのことば」では、何と44言語に共通性が見られ、技術の普及とともにそれを用いたときに使う表現がセットになって世界中に広まっていったことを想像させる。また巻末には各言語の執筆者による挨拶をめぐる楽しいエッセイが収録されている。

修士課程の学生だったころ、編者のひとり千野栄一先生の「プラグ学派の言語学」という授業に出席したことがある。構造主義言語学の発展に貢献した人物を紹介しながら言語学の入門にいざなうとても魅力的な講義だった。

以来私は「勝手に」千野先生を言語学の師と仰いで、せっせと講義を聴きに出かけた。当時北区の西ヶ原にあった東京外国語大学の近くにアパートを借りて住んでいたため、週に何日かは外大に行って授業を聴講した。千野先生の講義は、のちに珠玉のエッセイとして結実する豊富な話題がぎっぎと語られる何とも楽しいもので、冒頭の「お出かけですか」の話題は、千野先生から「勝手に」継承したもののひとつである。外大の日本語科で先生は留学生を対象に「現代日本語の構造」を講じておられた。教室の隅でおとなしく聴講していたある日のこと、テキストの輪読の順番が回って、あとは私を残すだけとなった。観念して読み始めると、「君は日本語の朗読が上手だね」とお褒めをいただき、毎回の授業で模範朗読の係に指名されてしまった。やがて顔を覚えていただいた頃、先生の研究室を訪ねて改めて挨拶をした。中国語とチベット語の方言を学んでいます、と自己紹介をすると「それならぜひ中国語を武器にして中国の未記述言語の調査をする仕事をしたらいい」というアドバイスをいただいた。その日は研究室でしこたまワインを御馳走になり、いい気分帰宅したことを覚えている。

大学院での修行を終えて就職した翌年、たまたま友人から広東語講座の代講を頼まれて

出向いた教室の講師控え室で千野先生に再会した。ちょうど同じ時間帯にチェコ語の購読の授業を担当されていたのだった。私は中国語教師として山梨県の短大に就職したこと、中国で話されているチベット系の言語調査の仕事をはじめたことを感謝を込めて報告した。先生に直接伺う機会はないにせよ、そんな経緯からこの楽しい辞典のシリーズの執筆者のひとりに加えてくださったのだろうと想像している。

世界の主要言語の挨拶を1冊にまとめたこの辞典は、外国からのお客さんに「帰国の飛行機でご覧ください」と進呈したり、国際学会での土産に持って行ったりして、どこでもたいへん喜ばれた。国際学会で出会った各国の研究者に拙論や著作を進呈しても、少数の専門家以外に喜んでもらえる可能性はほとんどないが、この辞典ならコミュニケーションにおける効果は絶大で、国籍・世代・性別・文理系を問わず、まず間違いなく楽しんでいただける。こうした研究交流上の「心づかい」はとても重要であるにもかかわらず、公費や科研費では手当てできないので、すべて自費で負担せざるを得ない。よい本だけに、「出会い」の数だけ本代がかかってしまうことが、この本の最大の欠点かも知れない。

(いけだ たくみ)

今回の一冊の本：

書名：世界のことば・出会いの表現辞典
 編者：石井米雄、千野栄一
 ISBN：4385151784
 出版者：三省堂
 出版年：2004 (本体2500円+税)

利用のご案内

附属図書館で所蔵しています
 配置場所：1階参考図書(館内利用)
 請求記号：KE617.4

生態学研究センターの「徳田文庫」 「種の起原」を完備

名誉教授 / 財団法人深田地質研究所理事・主席研究員 瀬戸口 烈司

ダーウィンの "Origin of Species" の日本語訳は「種の起原」と「種の起源」の両方がある、と思込まれている。そこで、これまで日本で出版された同書の訳書をすべて点検した。これまで9種類が出版されているが、日本で最初に訳出された「種源論」をのぞくと、他の8種類の訳書のタイトルは「種のキゲン」に統一されている。8種類のうち7種類は、「キゲン」の漢字に「起原」があてられ、「起源」を採用しているのは1種類しかない。日本では、「種の起原」と表記する伝統が定着している。それらを、表にまとめた。

東京開成館訳の「種之起原」と松平道夫訳の「種の起源」は、京大のどの部局も所蔵していない。おどろいたことに、立花銚三郎訳の「生物始源一名種源論」と各種の「種の起原」の訳書は、すべて「植生態」の所蔵であったことを検用のカードはしめしていた。各種の「種の起原」が1ヶ所に完備しているのは、奇跡に近い。理学部附属の植物生態研究施設の教官がダーウィンの "Origin of Species" に格別の興味をいだいており、日本で出版された訳書を意図的に買い集めた。そして、東京開成館と松平道夫の訳書をのぞいて、他をすべて買い求めた、というのが実情であろうと思われた。このことを、私が理事を務めている財団法人深田地質研究所の『ニュース』106号に記事にまとめた。

その『ニュース』を田隅本生先生にも送ったところ、次のようなご指摘をいただいた。各種の訳書を買集めたのは理学部動物学教室の徳田御稔先生（1968年定年退官）で、先

生の死後（1975年）植物生態研究施設の田端英雄先生が手配して徳田先生の蔵書のうち進化学関連の書籍は植物生態研究施設に、動物学関係のものは霊長類研究所にそれぞれ「徳田文庫」として移管されることになった。植物生態研究施設は1980年代に発足した生態学研究センターに統合された。

生態学研究センターが各種の「種の起原」を完備しているのは、上記のような事情による。ちなみに、田隅先生は、徳田先生の後任であった。徳田先生がダーウィンの訳書を集めたとき、日本語訳が「種の起原」に統一されていることに気がついておられた。徳田先生が在任中に担当しておられた「進化学」の授業を私も受講した。その授業で徳田先生は、ダーウィンの "Origin of Species" は丘浅次郎らしいの伝統で、「種の起原」と表記しなければならないと力説しておられた。

ところが、日本でもっともよく読まれている岩波文庫の八杉竜一訳の「種の起原」のなかで、大杉栄訳を「種の起源」と誤って紹介したために、日本では訳書は「種の起原」と「種の起源」の両方がある、という迷信ができあがった。徳田先生の主張はかならずしも受け入れられてはいなかった。しかし一覧図を参照すれば明らかである。徳田先生の主張は正しかったのである。その正しさは「徳田文庫」が証明していた。

（『ニュース』106号についての問い合わせは、財団法人深田地質研究所、電話03-3944-8010、ファックス03-3944-5404まで）

（せとぐち たけし）

日本で出版されたダーウィンの "Origin of Species" の訳書の一覧。ほとんどすべては「種の起原」で統一されている。例外は、「生物始源一名種源論」と松平道夫訳の「種の起源」だけ。

- 「生物始源一名種源論」立花銑三郎、経済雑誌社、1896
- 「種の起原」東京開成館訳（丘浅治郎譯文校訂）、東京開成館、1905
- 「種の起原」大杉栄、新潮社、1915
- 「種の起源」松平道夫、太陽堂、1924
- 「種の起原」小泉丹、岩波書店、1929
- 「種の起原」内山賢次・石田周三、ダーウィン全集（ ）白揚社、1939
- 同、創元社、1952
- 同、世界大思想全集 33、河出書房、1954
- 「種の起原」堀伸夫、CLARTE、1948
- 同、槇書店、1958
- 「初版『種の起原』 - 訳と解説 - 」徳田御稔（編）、三一書房、1959
- 「種の起原」八杉竜一、岩波書店、1963

ダーウィンの "Origin of Species" の訳書の表紙の一覧図。ほとんどすべては「種の起原」で統一されている。例外は、「生物始源一名種源論」と松平道夫訳の「種の起源」だけ。



上段：左から、立花銑三郎訳「生物始源一名種源論」(経済雑誌社); 東京開成館訳(丘浅治郎譯文校訂)「種の起原」(東京開成館); 大杉栄訳「種の起原」(新潮社); 松平道夫訳「種の起源」(太陽堂)

中段：左から、小泉丹訳「種の起原」(岩波書店); 堀伸夫訳「種の起原」(CLARTE); 堀伸夫訳「種の起原」(槇書店); 内山賢次・石田周三訳「種の起原」(ダーウィン全集、白揚社)

下段：左から、内山賢次・石田周三訳「種の起原」(世界大思想全集 33、河出書房); 内山賢次・石田周三訳「種の起原」(創元社); 徳田御稔(編)「初版『種の起原』 - 訳と解説 - 」(三一書房); 八杉竜一訳「種の起原」(岩波書店)

KURENAIコンテンツ紹介

KURENAI 登録5万件、そして機関リポジトリへの期待

生命科学研究所博士課程・日本学術振興会特別研究員 標葉 隆馬

KURENAI 5万件目の論文

Ryuma Shineha, Masahiro Kawakami, Koji Kawakami, Motohiko Nagata, Takashi Tada and Kazuto Kato. "Familiarity and Prudence of the Japanese Public with Research into Induced Pluripotent Stem Cells, and Their Desire for its Proper Regulation". *Stem Cell Reviews and Reports*. 2010, 6(1), p. 1-7.
<http://hdl.handle.net/2433/97981>

登録論文の紹介と経緯

2007年にヒトiPS細胞が作成され、iPS細胞という言葉は非常にメジャーになり、また再生医療という言葉もよく聞くようになりました。これらの研究は非常に社会的にインパクトの大きい研究であり、だからこそ、その研究に対する一般の方々の意識というものも考慮されなければなりません。しかし、ES細胞などの倫理的側面に関する意識調査例はあっても、より最近登場したiPS細胞に関する一般の方々の意識はほとんど把握されていないのが状況であり、どの程度の割合の方々がiPS細胞の存在を認識しているのか、どの程度の期待感を持っているのか、規制についてはどう考えているのかといった基本的な情報すら不足しているという現状でした。

そこで、調査としてはかなり大味なものになってしまい、調査者としては、満足は出来ないレベルの分析にはなってしまいましたが、iPS細胞や再生医療研究の認知度といった基本的なレベルから、まずは現状の大枠を捉えるような調査を行い、今後の調査につながるようなデータを提示することを目指しました。

機関リポジトリ、その役割

個人として、関連する分野の紀要論文の収集などで、京大図書館のリポジトリにはお世話になっています。また、国立情報学研究所の文献データベースCiNiiで行った検索から利用させて頂くということも多々あります。実際に利用している立場から、機関リポジトリは、研究者にとっても非常に有効な情報ソースであると考えています。

しかし、KURENAIを始めとする機関リポジトリの役割は、研究者にとっての情報源に留まるものではないとも考えます。大学の生産する「知識・情報」の持つ「公共性」を考えたとき、専門家が生み出す「知識・情報」が、専門家だけが読む専門誌だけに蓄積され、他の分野や一般の人々がアクセスできないということは、「知識・情報」の再分配において問題であり、より厳しい表現が許されるならば、「知識・情報」の不平等のような状況なのではないかとも思えてきます。

大学の持つ「知識・情報」への行き来があるということ、「知識・情報」へのアクセスが担保されているということは、公共的なコミュニケーションの欠かせない要素です。リポジトリ事業は、大学が社会とコミュニケーションを進めていく上で、新たなアクターの登場や関与を容易にするための重要なインフラの一つなのではないでしょうか。また同時に、大学に蓄えられている「知識・情報」のあり方を考える上でも、非常に示唆的な実践であるのではないのでしょうか。

また大学の持つ「知識・情報」にたいする外部からの需要は、「ある」のではないかと予

想しています。むしろ今までは、そもそも大学の持つ「知識・情報」の公開が不十分であったために、そして、そもそも大学の「知識・情報」にアクセスできることが知られていないために、その需要が把握されず、その需要が喚起されてこなかった可能性があるのではないか、潜在的な需要可能性を黙殺してきた部分が大学にはあったのではないかと危惧しています。逆に言えば、京大のKURENAIのように、フリーでアクセスできる場があるという情報がより広く流通するだけで、想像もしなかったような需要、さらには異分野間のインタラクションが喚起できるのではないかと、(やや楽観的過ぎる気がします)期待しています。願わくは、もう少し、一般的な認知度が上がり、利用者も増えていってくればと期待しています。

今後の展開への期待

研究者が現状置かれている状況を鑑みると、専門誌への投稿という事は専門家にとって避けては通れない条件であり、また既に時間に追われてもいます。そのため、研究者からはリポジトリへの登録に伴う負担を不安視する声もでるかもしれません。また実際に、現状

では、機関リポジトリにおける手続きや利用者の負担度は、機関によってまちまちであり、研究者側の負担となるケースもあるようです。

しかし、京大のKURENAIの場合、学術誌・商業誌で発行された文献についても、著作権等の取扱いや出版社との交渉を図書館の方で行って頂けるという手続きが取られています。研究者側が行うことと言えば、著者原稿を担当の方にお送りするだけという形式です。そのため、KURENAIへの原稿登録に際して、研究者側の負担はほとんどありませんでした。このようにKURENAIが専門の学術誌への投稿とKURENAIへの登録は共存し得るということ、またKURENAIが研究者への負担をかけない情報公開のインターフェイスであるという点は、学内の研究者にもっと周知されるべき事柄ではないかと考えています。

第4期科学技術基本計画のための「科学技術基本政策策定の基本方針」に関する議論の中でも、機関リポジトリ機能の拡充が謳われています。これは、リポジトリの持つ公共的性格への期待の表れではないかと考えています。おそらく今後生じてくるであろう、多くの議論や展開に注目していきたいと思う次第です。

(しねは りゅうま)

KURENAIはあなたの論文へのアクセスとインパクトを高めます

論文全文が公開できます！
<p>対象：学内研究者</p> <p>論文へのアクセスの幅、インパクトを高めます KURENAIで全文を公開することにより、電子ジャーナルを契約していない大学や企業の研究者・学生にもあなたの論文へのアクセスが可能になります。</p> <p>研究活動の広報に役立ちます ご自身/研究室の業績リストからリンクすると、タイトルだけでなく、論文本文まで紹介することができます。</p> <p>京都大学の優れた研究成果を保存し、後世に伝えることができます KURENAIでは登録していただいた論文を図書館で保存し、固定URLを付与することで論文への永続的なアクセスを保障します。</p>



お問い合わせ・コンテンツ送付先
附属図書館 情報管理課 電子情報掛
e-mail: dlkyoto@kulib.kyoto-u.ac.jp

経済学研究科・経済学部図書室の紹介

【図書室の概要】

経済学研究科図書室は学内に60近くある図書館・図書室の中で経済関係の資料を特に多く持つ図書室です。

場所は本部キャンパス時計台の北、法経本館、法経東館、法経北館とある建物群の中の法経北館に居室しています。

蔵書冊数は約52万5千冊、継続している雑誌は、日本語雑誌は772タイトル、外国語雑誌は348タイトルあります。また、和・洋あわせて11タイトルの新聞を購入しています。

資料は閲覧室スペースと書庫スペースに分けて配置しており、書庫スペースに大部分を配置しています。書庫は地上7層、地下2層の書庫棟を法学部と共用で使用し、それとは別に法経東館地下2階の書庫を経済学部調査資料室と共用で使用しています。

【蔵書の特徴】

蔵書は法科大学の時代から百年以上もの間、精力的に集められたコレクションとなっています。特徴は、第一に外国図書の一大コレクションがあげられます。アダム・スミス『国富論』の初版など貴重な資料を始め、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語など各種言語資料を所蔵し、最近では東アジア経済研究センターが収集した中国語図書を中心とした東アジアの経済資料を利用に供しています。第二に、和書では、日本経済史、地方史関係の文献が充実しており、特に徳川時代と明治初期の経済図書、明治後期、大正、昭和初期までの官公庁、私企業、団体などの刊行物が、旧植民地関係のものも含めて一大コレクションをなしています。第三に数多くの個人文庫が挙げられます。統計学を中心としたマイヤ

一文庫、経済史のピュッチャー文庫、新聞・ジャーナリズム・政治史の上野文庫といった特徴ある文庫が多様なコレクションを形成しています。第四に、営業報告書集成(約1000リール)、Keynes papers(170リール)といった和洋200種類以上の貴重なマイクロフィルムを所蔵しています。

【耐震改修工事について】

平成21年度より法経北館の耐震改修工事が始まり、閲覧棟・書庫棟の大幅な改修ならびに整備が行われました。そのいくつかの点を紹介します。

まず、閲覧室入口を改修し、ガラス壁が新しくなりました。法経北館に入るとすぐに図書室の中まで見通せ、開放感がある作りとなっています。コイン式ロッカー、ブックディテクションシステム、書庫出入管理装置の導入により、利用者の利便性とセキュリティが高まりました。現在、カウンターにて利用者の学生証・職員証と書庫出入管理システムで使用する入庫カードを交換し、書庫へ入っていただいています。閲覧室の書架、雑誌架、カウンター、検索台、一部の閲覧机を木製で新調し、いくつか窓を増設するなど、落ち着いた利用していただきやすい環境を整えました。また無線LANを設置しましたので、無線機能付きノートパソコンを持参いただければ学内ネットワークをご利用いただけます。

書庫棟につきましては地下1階、2階の書架の更新ならびに地下2階の倉庫を改装し、新たにB2南書庫を新設しました。地下1階は電動集密書架が配置され、収容能力が増加しました。また、エレベーターの更新、除湿機の導入、検索用端末の導入など利用と保存環

境の向上を行っています。

また、工事完了に合わせ利用規則を変更し、他学部生の入庫を可能とし、他学部所属者の貸出冊数も増やしました。



図書室入口付近

【耐震改修工事第二期工事について】

平成 21 年度より長期間の休室やサービスの制限等大変ご迷惑おかけしております。引き続き今年度は法経北館研究棟の工事が行われ、

工事開始は 8 月頃の予定です。工事が始まり次第、入口が建物南側より北側に変更となりますが、図書室は、工事期間中も開室いたしますので、どうぞご利用ください。また、整理掛事務室が文学部東館 4 階仮事務室に移転します。工事期間中の図書室の運用につきましては現在法学研究科、経済学研究科の話し合いにより検討されているところです。

耐震改修工事関連のお知らせは随時ホームページにてご連絡いたしますので、情報の確認にご利用ください。

経済学研究科図書室ホームページ
<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/library/>

今年度一杯引き続き利用者の皆様にはご迷惑おかけいたしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願ひいたします。

今後とも経済学研究科図書室はさらに便利で使いやすく快適な図書室を目指してまいりますのでよろしくお願ひいたします。

(経済学研究科・経済学部図書室)

電子ジャーナル・データベース認証システムおよび MyKULINE の利用について

図書館機構が提供する電子ジャーナル・データベース認証システムおよび MyKULINE は、ECS-ID 以外に京都大学教職員グループウェア ID (SPS-ID) にも対応しました。

- ・電子ジャーナル・データベース認証システム：平成 21 年 10 月から
- ・MyKULINE：平成 22 年 4 月から

MyKULINE とは？

図書館で借りている本の確認、貸出期限の延長、予約、新着図書・雑誌の通知登録や文献の取寄せ (ILL 複写・借用) 依頼などができます

詳細については以下の URL をご覧ください。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/bulletin/article.php?storyid=657>

担当部署：附属図書館情報管理課電子化推進グループ

ドイツにおける、学術情報の収集と流通に関するマクロ的戦略

ゲーテ・インスティトゥート主催 ドイツスタディツアー報告

京都大学工学研究科総務課図書掛桂地球系暫定図書室 坂本 拓

【はじめに】

2009年11月22日から11月29日までの期間に開催された、日本とドイツの大学・研究所の図書館職員が情報交換を行うためのドイツスタディツアーに参加させていただいた。本稿では、紙幅の許す限りで、このツアーの報告を行いたい。

このスタディツアーは、ドイツ外務省文化部門の独立機関である、ゲーテ・インスティトゥート（以後ドイツ文化センター）日本支部の予算により企画されたものである。

日本から、国立情報学研究所（NII）、科学技術振興機構（JST）、北海道大学、東北大学、一橋大学、筑波大学、京都大学、九州大学、物質・材料研究機構（NIMS）、放射線医学総合研究所（NIRS）、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の11機関より、計12名の職員が、ドイツ国立図書館（フランクフルト）、ゲッティンゲン大学図書館（ゲッティンゲン）、技術情報図書館（ハノーファー）、バイエルン州立図書館（ミュンヘン）、マックスプランクデジタル図書館（ミュンヘン）の5つの機関を訪問した。この5日間で、英語による合計約50本のプレゼンテーションが、日独それぞれの図書館員から行われ、それに対する活発な質疑応答がなされた。

【ツアーの目的】

ドイツ文化センター日本支部の図書館部門責任者である、クリステル・マーンケ氏がこのツアーを企画された目的は2点あると私は考えている。1つは、単純に日独それぞれの機関のグッドプラクティスを紹介する情報交換という点である。文化的・歴史的バックグラウンドが異なるため、日

本でドイツの事例を同じように真似ることは難しいと思われることもあったが、やはりとても刺激を受けるものが多かった。そしてより重要なもう一つの目的は、日本とドイツの図書館職員が今後連携していくためのネットワークを構築することである。

学術雑誌の価格高騰が果てしなく続き、京都大学内でもジャーナルの契約タイトル数を年々削減せざるを得ない状況が続いていることは、周知のことかと思う。17世紀に学術雑誌とそのための出版社が誕生した背景には、科学上の新たな発見・研究成果を公開し、それに対する批評や議論が、地理的に離れていても継続的かつ活発に行われるようにしたい、という研究者の切望があった。しかし、現在は学術雑誌の価格高騰が、研究者コミュニティ間の情報流通を阻害しているという本末転倒が起きている。この状況を改善すべく、研究者の所属する大学や研究所の図書館が、自館のサーバに研究者の論文を掲載しwebで公開する「機関リポジトリ」が世界中で立ち上げられ、学術情報が再び淀みなく流通するように、現在試みられている。「オープンアクセス」と呼ばれるこのような試みの中で、学術出版社の存在理由が無くなってしまったというわけでは決していないが、その担うべき役割は明らかに変質している。学術情報の生産・流通・利用に関わるステークホルダーが連携し、いち早くその新しいフレームワークを構築する必要性が生じているが、それは、一国の中だけでは決してできないのである。この学術情報流通の新しいフレームワークを構築するための国を超えた連携の礎を築くことこそ、クリステル・マー

ンケ氏が最も望まれていることだと私は随所で強く感じた。以下、ツアーの報告をしていきたいと思うが、まずは前提の知識として必要となる、極めてユニークなドイツの図書館制度の説明をさせていただきたいと思う。

【ドイツの図書館制度】

非中央集権制

ドイツは学術研究の長い歴史を持っているが、その反面、領邦国家の集合体であったという歴史も持っている。そのためにイギリスの British Library や、アメリカの Library of Congress のように、網羅的に国全体の納本を担当し、全国書誌を作成する、国立中央図書館が設立されたのは1912年と比較的遅かった。また、二十世紀の後半を、東西分裂で過ごしたという経緯および、州自治という政治的原則のため、他国のようにドイツという国全体の図書館制度に関して、イニシアティブをとって統制する単一の機関がいまも存在していない。

研究者による統制

しかしながら、DFG(ドイツ研究協会)というドイツの研究者による自治組織が、多くの図書館活動を戦略的にコントロールしている。具体的には、ドイツ全土の研究活動のインフラ整備に必要であると判断するプロジェクトにDFGが予算を配分するのだが、このプロジェクトには図書館によるものが多数含まれているのである。一例としては、ドイツ全体であらゆる学問領域の学術資料の網羅的コレクションを構築するためのプロジェクト「特別収集領域」が挙げられる。これは、全ての学問領域を細分化し、ドイツ全土の22の大規模図書館が、それぞれ担当している領域の学術資料を責任を持って収集する、というプロジェクトである。また、このプロジェクトにより収集された資料の一部は電子化されてそれぞれのサブジェクトごとにオンラインで無料公開されている。つまり、ドイツ全土の研究者は、自分の専門分野

の資料を閲覧するためのオンライン専門図書館を、常時利用できるのである。またDFGは、研究者の所属機関を問わず、国内の誰もが自由に電子ジャーナルを無料で利用できる、ナショナル・ライセンス契約に出資したりもしている。

上で、ドイツには図書館政策に関して統率する機関が無いと書いたが、日本よりもはるかに、大局的な戦略をもって国としての学術資料のコレクション構築と利用提供が行われていると感じられた。そしてそれをコントロールしているのが役人ではなく、利用者である研究者なのである。

【訪問機関】

ドイツ国立図書館

ドイツ国立図書館は、1912年にライプツィヒに設立されたドイチェ・ビュッヘライ、旧西ドイツの中央図書館であったフランクフルトのドイチェ・ビブリオテーク、そしてベルリンにある国立音楽図書館の3館が2006年に統合されてできた組織である。現在は電子資料を含め、ドイツ全土で刊行される書籍、音楽資料を網羅的に収集している。



ドイツ国立図書館外観

ゲッティンゲン大学図書館

ゲッティンゲン大学は、ドイツで最多となる40名のノーベル賞受賞者を輩出し、現在も連邦教育省から予算を重点配分されているドイツエ

リート9大学の一つである。ドイツのみならず欧州全体でのオープンアクセス運動で指導的な地位を担っており、DFG や EU からの出資による多くのプロジェクトを推進している。

技術情報図書館

ドイツでは、医学・経済・自然科学の3分野において、ドイツ全体で文献の収集と提供を一元的に管理しておこなう、中央専門図書館というものが設立されている。ハノーファーにあるこの技術情報図書館は、自然科学を担当する中央専門図書館である。科学技術情報全般についてのポータルサイト、GetInfo を管理されている。

バイエルン州立図書館

この図書館は、1558年に設立され、欧州でも屈指の数のインキュナブラを所蔵している。「州立」という名称がついているが、実質的には、ナショナルライブラリーの役割も一部担っている大規模図書館である。現在は所蔵資料の電子化を精力的に推進しており、全自動で資料を電子化するスキャンロボットも見せていただいた。電子化において命綱となるOCRの品質改良プロジェクトなども進められていた。



全自動スキャンロボット

マックスプランク電子図書館

マックスプランク研究所は、ドイツでも最大の研究所であり、研究分野は多岐にわたる。所属し

ている図書館は71にのぼり、50を超える図書館・室を持つ本学と似た組織とも言える。契約している電子リソースのニーズ・金額・利用実績からパッケージの評価を行う試みなどもされており、これは大変興味深かった。オープンソースのリポジトリ・インターフェイス、Pubmanなども開発されていた。

【プロジェクト】

訪問した上記の5機関で説明していただいたプロジェクトの全てをここでご紹介することはできないので、いくつかをピックアップしたい。

kopal

ドイツ国立図書館は、紙媒体の資料の収集だけでなく、電子媒体資料のオンライン納本も現在行っている。これらのデジタル資料はフォーマットの陳腐化など様々な理由で、紙の資料よりも中・長期保存が困難であるとも言われている。この問題を解決し、持続的なデジタルアーカイブを可能にするためのシステム、kopalをドイツ国立図書館は現在運用している。このkopalは、システム面での開発は、IBMとオランダ国立図書館が協力し、現在サーバの管理は、ゲッティンゲン大学図書館が行っている。IT企業、他国の図書館、大学図書館という様々な機関との積極的な連携により成功したプロジェクトである。

オープンチョイス契約

これは、ゲッティンゲン大学、およびマックスプランク研究所の研究者が、論文をシュプリングァー社に投稿した場合、その電子ジャーナルの論文を、シュプリングァーのホームページから誰もが無料で読めるようにする契約である。ただし、大学・研究所は、シュプリングァーとのジャーナルの契約規模を維持し続けなければならない、この負担は決して小さくはない。査読が終了した論文をオープンアクセスにできるメリットはあるが、まだ実験的性質の強い契約であるとい

う印象を強く受けた。しかし私を含め日本側の参加者からの質問が相次ぎ、この契約への関心の高さが伺えた。

PEER

EUの予算によるプロジェクトである。学術情報の生産者である研究者と、出版社、図書館の3者にとってもっとも好ましいオープンアクセスの形態とはどのようなものなのか、を実験的に模索したものである。ドイツからはゲッティンゲン大学図書館とマックスプランク研究所が参加し、他にも欧州各国の大学・研究機関が名を連ねている。この実験の中において、研究者からの投稿を受け付けた出版社は、論文のメタデータを研究機関のリポジトリに受け渡すことは全面的に賛成したが、査読の終了した論文本文については、5割のケースでしか提供が行われなかった。残りの5割に関しては、出版社側から著者に論文のリポジトリへの提供がアナウンスされ、著者版の論文がリポジトリに掲載された。

German Medical Science

ドイツ医学中央図書館が管理する、医学関連資料のオープンアクセス・ポータルサイトである。収録されている資料は、電子ジャーナル、学会抄録、研究レポートなど多岐に渡る。ここでは、14誌から2000論文が提供されているが、この14誌の中の2誌は、PubMedにも収録されている雑誌である。このGMSの刮目すべき点は、オープンアクセス誌であっても、掲載されている論文は査読済みであることである。ドイツ科学医学会連合という学会が、会員の研究者への査読依頼を行っている。また、このサイトの運営費用の3割は学会の出版費用から支出されており、小規模な学会誌を電子ジャーナル化して出版しているという理解を研究者から得ることができている。

DRIVER と COAR

DRIVER とは、ヨーロッパ中に多数存在する、

大学・研究所のリポジトリを一括して横断的に検索することができるシステム、およびそのためのコンソーシアムの名称である。これはEUの予算による期限付きのプロジェクトであり、ゲッティンゲン大学図書館長のベルナルト・ロツウ博士が、コーディネータを勤められていた。

2009年11月に第2期計画が終了したことに伴い、DRIVERの活動を永続的かつ、よりグローバルに展開するためのコンソーシアムCOARが設立された。このCOARもロツウ博士が議長を務められ、欧州のみならずカナダや東アジアとの連携も実現されている。現在、日本からはDRF(Digital Repository Federation)と国立情報学研究所がCOARに加盟している。

【おわりに】

世界の図書館界を見たとき、やはりアメリカやイギリスは先駆的な存在であり、大変素晴らしい多くのプロジェクトを行っている。それに対して、ドイツの図書館がユニークであるのは、連携への意識が非常に強いことである。冒頭で述べたようにドイツは歴史の中で、領邦国家つまり小さな王国の集合体であった。小さな王国の中では、何をすることも限界があり、隣の王国と協力・共有しなければ、大きなことは何もできなかった。このドイツに特有の、連携への志向こそが、グローバル化といわれる今日、大きな意義を持っているのであろう。出版社と連携したオープンアクセスの新しい形態の模索や、欧州全体のリポジトリ・コンソーシアムの構築など、これらは今後の学術情報流通を考察する際、非常に重要な事例となるであろう。ドイツ文化センターが企画されたこのツアーにより、日独のより大きなネットワークが生まれることを心より願う次第である。

Und am Ende möchte ich herzlich "Danke!" sagen. Ihnen, Frau Mahnke.

(さかもと たく)

教員著作寄贈図書一覧

(平成22年2月～平成22年5月)

身分・所属	寄贈者氏名	書名	出版社	出版年
名誉教授	狭間直樹	清末政治思想研究(1)(2) (小野川秀美著, 狭間直樹解説)	平凡社	2009 - 2010
人文科学研究所	籠谷直人	グローバル・ガバナンスの歴史と思想	有斐閣	2010
人間・環境学研究科	福岡和子	悪夢への変貌	松籟社	2010
文学研究科	紀平英作	歴史としての「アメリカの世紀」	岩波書店	2010
経営管理大学院	中井稔	企業課税の事例研究	税務経理協会	2010
文学研究科	苧阪直行	笑い脳:社会脳へのアプローチ	岩波書店	2010
文学研究科	家入葉子	Verbs of implicit negation and their complements in the history of English	John Benjamins Publishing	2010
名誉教授	竹本修三	京大地球物理学研究の百年	[国際高等研究所]	2010
文学研究科	宇佐美文理	「歴代名画記」<気>の芸術論	岩波書店	2010
薬学研究科	金子周司	ライフサイエンス必須 英和・和英辞典 改訂第3版	羊土社	2010
アジア・アフリカ地域研究研究科	池野旬	アフリカ農村と貧困削減	京都大学学術出版会	2010
人間・環境学研究科	河崎靖	アフリカーンス語への招待	現代書館	2010
教育学研究科	川崎良孝	揚子江デルタ地域の公立図書館	京都図書館情報学研究会	2010
原子炉実験所	卜哲浩	Nuclear reactor physics experiments	京都大学学術出版会	2010
京都大学文化財総合研究センター	清水芳裕	古代窯業技術の研究	柳原出版	2010

この一覧は附属図書館への寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にいただきました。今後とも蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしくお願いいたします。

附属図書館は、試験期間中の土日祝日の利用時間を延長します

「附属図書館」・「学習室24」とも 10:00 - 22:00

平成22年度は、試験期間の土日祝日の利用時間を延長します。(7/17 - 8/1)

ただし、試験期間以外については、現行の利用時間(10:00 - 17:00)で引き続き運用します。

詳しくは、附属図書館ホームページやLSNなど、図書館からのお知らせをご覧ください。

平成21年度蔵書統計

(平成22年3月31日現在)

部 局	新規受入冊数			蔵書冊数			入力冊数累計		
	和書	洋書	計	和書	洋書	計	和図書	洋図書	計
附属図書館	13,026	2,944	15,970	600,752	252,265	853,017	442,963	194,197	637,160
附属図書館宇治分館	381	909	1,290	11,944	54,883	66,827	10,091	38,590	48,681
文学研究科・文学部	12,768	10,196	22,964	623,596	401,031	1,024,627	404,491	382,364	786,855
教育学研究科・教育学部	2,134	1,025	3,159	91,339	65,771	157,110	87,142	61,007	148,149
法学研究科・法学部	6,285	4,623	10,908	294,898	381,517	676,415	196,165	253,924	450,089
経済学研究科・経済学部	3,577	1,965	5,542	274,560	252,248	526,808	248,571	229,209	477,780
理学研究科・理学部	1,103	1,920	3,023	44,402	187,149	231,551	34,539	144,356	178,895
医学研究科・医学部	2,443	1,130	3,573	88,814	152,804	241,618	81,462	134,023	215,485
薬学研究科・薬学部	217	128	345	11,072	27,668	38,740	10,732	26,152	36,884
工学研究科・工学部	1,807	1,532	3,339	138,402	205,721	344,123	114,109	149,301	263,410
農学研究科・農学部	1,384	1,032	2,416	142,853	126,525	269,378	86,844	68,875	155,719
人間・環境学研究科・総合人間学部	7,778	3,606	11,384	301,944	266,201	568,145	256,742	196,954	453,696
エネルギー科学研究科	47	198	245	4,305	5,077	9,382	5,289	3,623	8,912
アジア・アフリカ地域研究研究科	446	5,425	5,871	12,947	84,050	96,997	12,654	82,915	95,569
情報学研究科	544	669	1,213	16,565	54,677	71,242	15,947	54,335	70,282
生命科学研究科	0	0	0	54	60	114	30	55	85
地球環境学学舎・学舎	911	833	1,744	2,133	1,854	3,987	2,133	1,853	3,986
公共政策連携研究部・公共政策教育部	268	35	303	919	163	1,082	919	163	1,082
経営管理連携研究部・経営管理教育部	92	198	290	943	331	1,274	943	331	1,274
人文科学研究科	4,077	851	4,928	487,823	85,700	573,523	202,751	77,503	280,254
再生医科学研究科	1	75	76	442	4,568	5,010	88	713	801
基礎物理学研究所	216	1,237	1,453	9,246	84,886	94,132	6,537	66,781	73,318
ウイルス研究所	0	17	17	305	3,307	3,612	297	2,843	3,140
経済研究所	443	607	1,050	41,474	37,685	79,159	41,152	37,712	78,864
数理解析研究所	160	2,049	2,209	7,199	82,236	89,435	6,921	78,779	85,700
原子炉実験所	255	276	531	14,744	36,252	50,996	14,555	31,475	46,030
霊長類研究所	92	244	336	7,405	17,196	24,601	7,337	17,264	24,601
東南アジア研究所	445	2,813	3,258	27,299	141,752	169,051	23,893	102,939	126,832
学術情報メディアセンター	22	2	24	5,931	12,715	18,646	3,851	7,543	11,394
放射線生物研究センター	13	0	13	502	2,036	2,538	440	2,081	2,521
生態学研究センター	122	176	298	8,670	6,178	14,848	8,620	6,149	14,769
地域研究統合情報センター	44	240	284	51	40,831	40,882	4,729	20,941	25,670
放射性同位元素総合センター	30	4	34	154	53	207	184	23	207
環境保全センター	38	27	65	613	1,379	1,992	292	1,372	1,664
国際交流センター	0	0	0	5	0	5	0	0	0
高等教育研究開発推進センター	33	10	43	2,552	1,014	3,566	2,490	881	3,371
産官学連携センター	33	24	57	613	47	660	613	47	660
フィールド科学教育研究センター	122	46	168	13,887	8,550	22,437	6,099	5,017	11,116
福井謙一記念研究センター	0	0	0	58	7	65	58	7	65
こころの未来研究センター	5	2	7	92	162	254	91	162	253
野生動物研究センター	0	0	0	41	0	41	41	0	41
保健管理センター	0	0	0	7	15	22	0	0	0
大学文書館	0	0	0	696	0	696	696	0	696
計	61,362	47,068	108,430	3,292,251	3,086,564	6,378,815	2,343,501	2,482,459	4,825,960

(注) 附属図書館宇治分館は、化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所の蔵書数等を含めた数

附属図書館利用統計（平成21年度）

入館利用状況

1. 年間入館者総数

内 訳 853,956人 (前年比26.8%増)

学内	入館機*	840,723	
	マニュアル**	3,955	
学外	閲覧***	8,285	
	見学	993	(人)

* 卒業生を含む

** 忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者

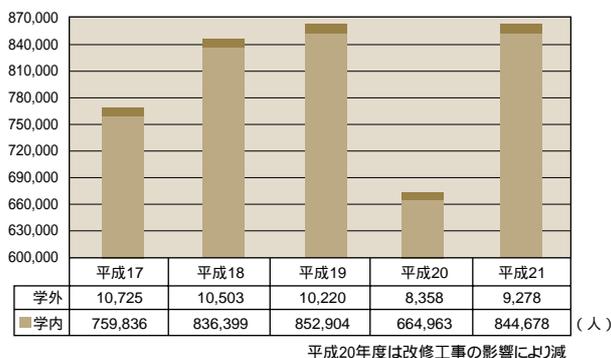
***学外者の特別閲覧願手続きによる入館者

入館機による入館者 840,723人

開館日	1日当たり	2,510	前年比15%増
平日	1日当たり	3,189	前年比17.1%増
土・日曜日	1日当たり	1,121	前年比10.6%増
1日の最多入館者数*		5,973	(人)

*平成21年7月15日

2. 入館者総数5年間推移



資料利用状況

1. 普通図書貸出利用状況

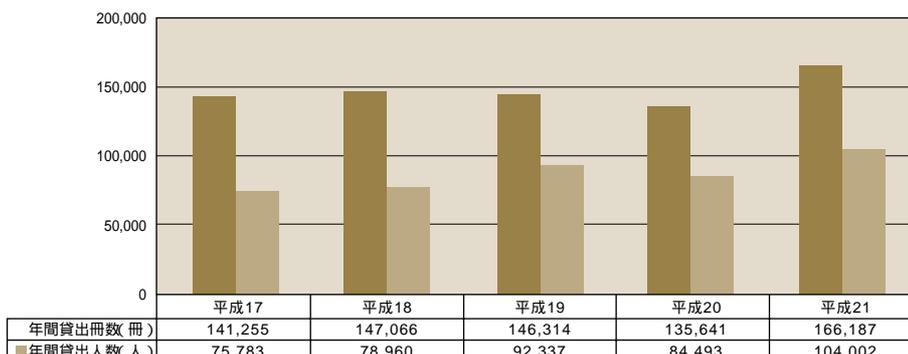
年間利用冊数 168,880冊 (前年比22.3%増)

年間利用人数 105,574人 (前年比23.2%増)

2. 学内者への貸出

	平成20年度	平成21年度	前年比
年間貸出冊数	135,641冊	166,187冊	22.5%増
年間貸出人数	84,493人	104,002人	23.1%増
1日平均貸出冊数	447冊	496冊	49冊増
1人当たり貸出冊数	1.6冊	1.6冊	
年間貸出冊数最高日	7月1日(1,040冊)	11月24日(1,197冊)	

3. 貸出状況5年間推移



3. 開館日数

335日

平日	225
土曜日	49
日祝日	61
閉館日	30

(日)

4. 学習室24入室者総数

181,170人

利用対象者数

1. 登録者総数

37,500人 (平成22年5月1日現在)

教員	3,762
院生	9,807
学生	13,515
職員	3,659
その他	6,757

(人)

教員には非常勤講師、共同研究者等を含む。

院生には大学院聴講生、研修員等を含む。

学生には学部聴講生等を含む。

職員には非常勤職員を含む。

その他には卒業生他を含む。

4. 貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1	和貴重書	108
2	谷村文庫	87
3	富士川文庫	78
4	河合文庫	42
5	菊亭文庫	30

(点)

参考業務

文献調査<国内>

1. 受付件数

		平成20年度(件)	平成21年度(件)
内容	所蔵調査	5,353	6,711
	事項調査	772	746
	その他	3,470	2,988
	合計	9,595	10,445
形式	FAX(文書を含む)	1,308	1,083
	電話	1,978	1,978
	カウンター	6,309	7,384
	合計	9,595	10,445

2. 依頼件数

		平成20年度(件)	平成21年度(件)
内容	所蔵調査	31	70
	事項調査	41	33
	合計	72	103
形式	FAX(文書を含む)	72	103

3. 受付・依頼件数合計における 学内者・学外者別利用件数

	平成20年度(件)	平成21年度(件)
学内者	5,329	6,438
学外者	4,338	4,110
合計	9,667	10,548

文献調査<国外>

受付件数

平成20年度(件)	平成21年度(件)
57	37

文献調査<合計>

受付・依頼件数

平成20年度(件)	平成21年度(件)
9,724	10,585

(参考)

FAX・文書による受付・依頼の機関別件数
(平成21年度)

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	170	7
国立大学	186	44
公立大学	35	0
私立大学	361	24
国立共同利用機関	18	2
公共図書館等	29	3
非営利団体	72	18
一般企業	17	0
個人	3	3
国立国会図書館	192	2
合計	1,083	103

相互利用

1. 文献複写

	平成20年度(件)	平成21年度(件)
依頼	4,920	4,596
受付	6,937	5,553
合計	11,857	10,149

平成21年度内訳

	国外	国内	学内	合計
依頼	127	3,672	797	4,596
受付	247	4,971	335	5,553
合計	374	8,643	1,132	10,149 (件)

2. 現物貸借

	平成20年度(件)	平成21年度(件)
依頼	1,427	1,274
受付	2,719	2,696
合計	4,146	3,970

平成21年度内訳

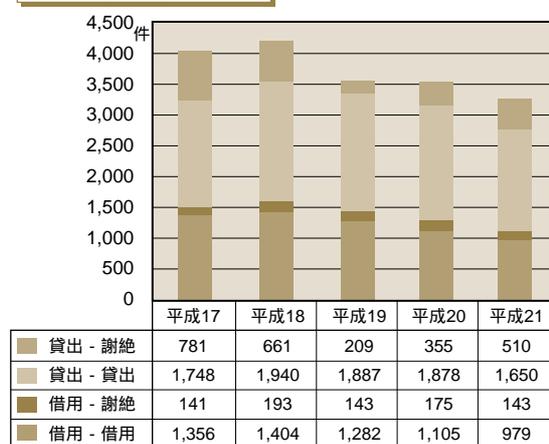
	国外	国内	学内	合計
依頼	44	1,122	108	1,274
受付	48	2,160	488	2,696
合計	92	3,282	596	3,970 (件)

文献複写(国内)5年間推移



学内ILLは含まません

現物貸借(国内)5年間推移



学内ILLは含まません

図書館の動き

平成22年

3月 5日	図書館機構将来構想説明会 海外調査研修報告会	5月 11日	業務システム研修(収書・実習 ~13日)
11日	近畿イニシア運営委員会	14日	図書系職員初任者研修
25日	図書系連絡会議	19日	業務システム研修(ILL)
26日	「次世代図書館システム構築基本設計書 策定支援業務」最終報告会	20日	国立大学図書館協会理事会(東大)
		21日	外国雑誌センター館会議(東工大)
		27日	図書系連絡会議
		28日	業務システム研修(目録)
4月 5日	附属図書館新入生オリエンテーション(~17日)	6月 2日	業務システム研修(閲覧)
16日	留学生ツアー	24日	近畿イニシア初任者研修(~25日阪大)
22日	図書系連絡会議	28日	図書館協議会第三特別委員会 (平成22年度第1回)
23日	国立大学図書館協会近畿地区協会総会(阪大)	29日	図書系連絡会議
28日	業務システム研修(収書・講義)		
30日	図書館協議会(平成22年度第1回)		

目次

静脩企画 利用者座談会「こうあってほしい!京大の図書館・室」	1
60言語で書かれた一冊の本 石井米雄/千野栄一編『世界のことば・出会いの表現辞典』<一冊の本シリーズ16> 池田 巧 ..	8
生態学研究センターの「徳田文庫」 「種の起原」を完備	瀬戸口 烈司 .. 10
KURENAIコンテンツ紹介 KURENAI登録5万件、そして機関リポジトリへの期待 標葉 隆馬 ..	12
経済学研究科・経済学部図書室の紹介	14
ドイツにおける、学術情報の収集と流通に関するマクロ的戦略 ゲート・インスティトゥート主催 ドイツスタディツアー報告	坂本 拓 .. 16
教員著作寄贈図書一覧	20
平成21年度蔵書統計(平成22年3月31日現在)	21
附属図書館利用統計(平成21年度)	22
図書館の動き	24

編集後記

今年度も昨年度に引き続き「利用者サービス」をテーマに記事を組んでまいります。はじめての企画「利用者座談会」では、参加者からの多くのご意見・ご要望のなかに、図書館への期待を感じるとともに、図書館が学生生活に与える影響の大きさと責任の重さをあらためて感じた2時間でした。(n)